

文化薫道

ぶんか
くんどう

◆其の百二十八

阿志岐山城跡の巨石石垣

古代大宰府の南東、宮地岳に築かれた阿志岐山城(国史跡)では、長さ約1・4 kmにおよぶ城域の各所で列石と土塁が確認されています。なかでも、土塁が谷を越える部分にある第3水門石垣は、幅約23 m、残存する高さが約3・8



▲第3水門石垣3D計測データ

mの城内最大の構造物で、巨大な石壁のようです。

石垣には、同じ時代の大野城や基肄(きい)城よりも、はるかに大きい切り石が使われています。ぴったりと寸分のすき間もなく組み上げられているその様子は、時代は違えども、カミソリ一枚入らないと言われる南米インカ帝国のマチュピチュ遺跡の石積みをほうふつとさせます。また、階段状に積み上げられた控え積みの様子は、まるでエジプトのピラミッドのようにも感じます。

石垣表面の石は154個確認でき、奥行きを0・6 mと仮定すると、計算上の石の重量は1つの石で最大2・6トン、総重量は少なくとも約33トンに達すると考えられます。これらの巨石は、石どうしが接する面を弓なりに加工して密着させ、細かな段違いの切り欠きでかみ合っています。また、石の上面は、その上に積む石の形に合わせた凹みを作っていました。石を上下左右にがっちり組み合わせることで、千年のときを越えてもその荷重を支えることができたのです。その技術の高さには、本当に驚かされます。

図文化財課